

二〇二六年五月二日（参加者一七名）

この山の主といふべき大桜	すみれ
ここもまた古木伐らるる山桜	きりん
濃淡のグラデーションや藤の花	花茗荷
思ひ出を紡ぐ古城の桜かな	わかば
白藤の淡き影敷くベンチかな	あきこ
万葉の歌碑あれば誦す藤の苑	わかば
花藤に虻の来ぬ日や雨催ひ	よし女
川面へと迫り出して散る大桜	むべ
藤棚に翅音の主を探しけり	むべ
児ら去りし遊具へ影す夕桜	博充
棚藤の淡き影さす石畳	博充
藤房の伸びて水面に触れんとす	博充
空へ伸び真向きそむきや藤の蔓	よし女
シャンデリアめく棚藤を仰ぎけり	康子
あひ集ひ笑顔に開く花御膳	わかば
山風に振れ振れて懸かり藤	花茗荷
山深く入りきて出会ふ大桜	すみれ
藤棚のベンチに憩ふ至福時	すみれ

薄墨の影を曳きたる夕桜

あきこ

おおいなる宿り木透かし花は葉に

なつき

若鮎句会・みのもる選・二〇二六年五月一日